

北條時敬校長の四高赴任と校風改革

—〈教師－生徒関係〉の構築の試みとして—

The background and unique features of reform in the “School Spirit”
by Hojyo Tokiyuki at the Fourth High School

金沢星稜大学人間科学部教授 井上好人

INOUE, Yoshito

はじめに

北條時敬（1858年－1929年）は草創期の第四高等学校長として、その校風の礎を築いた功績であまりにも有名である。また、その後、東北帝国大学総長や学習院院長を歴任し、我が国の高等教育の在り方を理論面だけでなく現場実践の中から問い続けた教育者としてきわめて重要な人物である。

小論は、そういった北條の第四高等学校時代の業績を北條自身の記録から掘り起こし、在任当時の石川県を取り巻く教育情勢をも鑑みながら、彼が構築しようと企図した〈教師－生徒関係〉の教育学上の特徴を析出し、四高史の中に位置づけることを目的としている。

北條は、1885（明治18）年、東京帝国大学理学部数学科を卒業して石川県専門学校（後の第四高等中学校）で教師生活をスタートさせ、その後、東京帝国大学大学院に入学、1891（明治24）年第一高等中学校教諭、1894（明治27）年山口高等学校校長をへて、1898（明治31）年第四高等学校長として赴任した。1902（明治35）年、広島高等師範学校校長として転出するまで4年の在職期間であった。

図1は、よく紹介される北條時敬の写真である。撮影時期は不明であるが、おそらく東北帝国大学総長在任時と思われる^{注1}。風貌は、「均斉のとれた顔貌、意力に引締まった口許、温容掬すべき豊頬、哲人のみに見る清燈の眼眸」であり、初対面の印象として、「極めて淡泊相な物欲に超然たる如き」でありながらも「教育者くさくない」雰囲気を抱かせた。その性格は、「少小の時分より至つて寡言」、「話は至つて訥弁で人によつては随分判り悪い感じを持つた」^{注2}らしい。それで初対面の人やあまり親密でない人は手持無沙汰で、時として数十分も無言で居たたまれずに座を辞してしまう人もいたという。

そんな寡黙ながらも清燈で静かな意思を内に秘める北條は、四高在任中、どのような思いでどのような校風を樹立しようと考えていたのだろうか、そして彼の努力は、当時の四高を取り巻く教育社会の状況をどのように打開しようとしたものだったのだろうか。小論は、北條自身の記録と『北國新聞』記事とを往還的にみることによってこの問いを検討していく。そして、『時習寮史』に「（北條は）その高邁な人格と見識より發する獨特の教育法を以て、専ら校風の刷新發揚に意を用ひられ眼覚しい成果を挙げられた。四高の精神的基礎は實にこの時代に初めて築かれた」^{注3}と紹介される「獨特の教育法」とは〈教師－生徒関係〉の観点からどのような特色をもったものであったのか、



図1 東北帝国大学総長
当時の北條時敬

四高史に位置付けたい。

ところで、「校風」という語を、笈田（1968）の「教育目的や教育方針の具現されたものや教育目的によって生徒の学校生活の様式化されたもの」^{注4}と定義するならば、「学風」とか「学校の気風」も含め校風についての議論はかなり早く、高等中学校の時期^{注5}から様々な媒体により議論されていた。当初は校長による教育方針や理念の発現として「やはり中心は教師や学校に方向づけられたもの」^{注6}であり、明治三十年代に入ると次第に学生自身の覚醒と自治への希求を伴って発現されるようになっていく。

先行研究は、その多くが校友会誌を中心になされる議論の応酬から、学生たちの自治への「覚醒」を読み取ることに主眼が置かれるか、あるいは、校長による人格的な薫陶という側面が強調されるかのいずれかであった。例えば、次のような論調である。

第一高等学校に於ては明治三十一年から三十九年まで在任した狩野亨吉校長^{注7}、また明治三十九年以降在任した新渡戸稲造校長等の高度な教養と強い個性による教導が、伝統的な籠城主義を高いモラルの次元に定着させ、また広い西欧的教養による理想主義の裏付けにより、これを更に近代的に開眼させたこと、また第三高等学校に於ては、創立以来永年にわたり在任した折田彦市校長の人格による無為にして化すと云った不干渉の教育方針が、類を見ぬ自由の気風となって結実しつつあったのである。（『旧制高等学校全書』第一巻、28頁）。

しかしながら、現実に学生指導に携わり相当な役割を果たしてきたであろう教師（校長も含め）についてはこれまであまり分析の俎上に載せられてこなかった。校風論が学生たちの学校生活の主要な問題として真剣に議論される陰にあって、教師たちは個人としてあるいは教師集団として何を考え、どのような方針で生徒に関わり、学生の「覚醒」を支援してきたのだろうか。笈田（前掲書、43頁）が「校風について考えたり、論じたりするのは、その問題の性格から生徒のみではなくて教師をも含めた学校全体であった」と示唆した点は未だ十分解明されてはいない。

この問題については、井上（2012）による四高・河合良成世代の校風改革運動を取り上げた論考がある。これによると同運動は、日清戦争以降の人々の学生へのまなざしの変化をうけて、学生自身のアイデンティティの変容をめぐる模索と苦闘の過程のひとつの象徴的な現れであったと分析され、これを支援する新しい教師像として、「オルタナティブ（alternative）な教師像」という仮説が提示された。ちょうど北條校長時代はこうした新しい教師像が形成されていく前段階にあたるわけだが、果たして北條はどのような教師像を理念として打ち出したのだろうか。「四高史に位置付け」るとはこの意味においてである。

なお、小論で用いる語について、一般的な記述としては「教員」、「学生」とするが、両者の関係を念頭に置いた場合は、「教師」、「生徒」、あるいは＜教師－生徒関係＞のように記述するものとする。

1. 北條時敬校長の四高赴任と彼を取り巻く教育社会の状況

北條時敬に転任の辞令が降りたのは、1897（明治31）年2月のことであった。「第四高等学校長ニ転任ス」との記録がある^{注8}。記録によれば、同月27日、山口を出立し、3月4日、小松から金沢へ入った。「白山西南ニ屹立シ南方一体ノ山脈雪ヲ以テ覆ハレ吹下ス山風寒ク肌ニ徹シ曇天灰黒時侯寒陰ナリ之ヲ前四五日ニ経過シタル山陽沿海ノ地ノ天気快晴ナルニ比スルニ實ニ雲泥ノ差ナリ」

との記述があり、金沢出身の北條ではありながら、あまりの気候の相違に改めて目を見張った様子が窺える。少し推論すれば、当時、北陸地方の風土的な特徴を教育環境としてネガティブに捉えるアナロジーがしばしば見うけられることから、ひょっとして北條もこれから赴任する四高での前途多難さを「曇天灰黒時候寒陰」に重ね合わせ、少々鬱然たる気分がよぎったと言えなくもない。

その翌日（3月5日）に、四高に初出勤し、職員とそして生徒全体にも新任の挨拶を行っている。

この時代、高等学校のみならず広く教育界を取り巻く現象が、その政策的な変化の過渡期にあり、従来までの教員および学生の文化・風俗が“問題化”されるようになってきていた。特に教員への世間のまなざしに変化がみられるようになった。唐澤（1955）は、小学校教員について明治三十年頃を境に、教員の地位が相対的に低下していったことを指摘している。教員の出身階層の中心が士族から農村出身者へ移行していったことも背景に、教員は「漸次その風格を縮少していつたのであるが、なおこの頃になると教師は更に社会的権威を喪失し、世間より『教員たるものが』という如き教師の倫理をおしつけられるに至つた」^{注9}という。

北條も、山口高等学校長時代の1896（明治29）年、「此頃世上學校ニ不穩ノ事多シ我が高等学校モ亦此一二伍スルニ至リタルハ恥辱ナリ」^{注10}と述べており、学校を預かる司令塔としての校長職の難しさを感じるようになっていた。北條が危惧する「不穩ノ事」とは何だったのか、そして「恥辱ナリ」との憤慨は何に向けられていたのか。

ところで、北條が山口高等学校から四高に転任したのは、「四高の綱紀が頹廢して問題になったため」^{注11}であるといわれている。この因果関係は不明であるにしても、彼が赴任する前後の四高（および石川県の教育界）に、「教師」と「生徒」をめぐってどのような問題が話題に上っていたのか、把握しておく必要があるだろう。本節では、四高赴任の約1年前、石川県の教育界を揺るがした「不敬事件」（1-1）から、赴任後に彼自身が新聞に揶揄された事件（「第四高等学校内部の暗潮」1-2）と学生の風紀問題（「書生登楼事件」1-3）までを取り上げ、彼が遭遇した教育問題を新聞メディアとの関係から明らかにしてみることにする。

1-1 赴任前～石川県工業学校教職員の不敬事件～

「不敬事件」とは、1897（明治30）年1月12日、石川県工業学校の教職員が、「皇太后陛下の崩御を承りながら（國中喪の第二日に）新年の祝宴を旗亭に開き」、これが「皇室に對せる大不敬」であると非難された事件である。

事の発端は、『北國新聞』（1897（明治30）年1月14日付）の記事であった。雑報記事中に「学校職員の不心得」と題して、皇太后崩御について2日前の1月12日「号外」報道で広く人々の知るところであったにもかかわらず、同日午後「某縣立学校」の職員が兼六園内の酒亭に集まり新年宴会を催した、旨の報道がなされたのである。「皇太后陛下」とは、英照皇太后（1835（天保6）年1月11日—1897（明治30）年1月11日）のことである^{注12}。

その1ヶ月後、「学校職員」の「不心得」は「不敬事件」として改めて取り上げられる。『北國新聞』（1897（明治30）年2月17日記事）は、「縣立學校の不敬事件（石川縣工業學校職員 皇太后陛下の御喪を承りながら新年祝宴を開けり）」と題して再度取り上げたのである。記事は、「縣立学校」職員の「新年宴会」を「皇室に對せる大不敬なり」と断罪し、さらに「石川縣教育海^マの腐敗」を示す例証として「学校職員を筆誅せざるべからず」と強い口調で批判した。記事は、料理屋に直接取材され、次のように詳しく書かれている。校長・梅田五月以下職員は（1月12日）午後六時に兼六園の料亭に参会し酒宴がはじまった。「斯くて白首を相手に盃の数を重ねるや、尚更ら崩御の

御事も國喪の謹慎も忘却したりと見え、一人歌へば満座之れに和し、踊るもあれば舞ふもあり、遂には総崩れとなりて、十八番の都々逸、カツボレ、甚句、劍舞等に狂ひ興じ大浮れに浮れたれ(略)」という状況で、巡査も懇々と注意を亭主に与えるほどであった。続けて記事は次のように批判する。「彼等職員が警察官の注意を受くるまでに至れる、又た之れを受けて反て巡査の退去後一段の喧嘩を加ふるまでに至れる、妄状の上の妄状、故意の上の故意、吾輩は之れを評するに殆ど其語なきを如何せんや、斯の如き職員を以て教職に當らしむ、石川県教育海の腐敗せる、亦た宜べなるかな」と。

記事は、「学校職員」の「不心得」の問題からより深刻で重大な「不敬事件」へ、さらにその糾弾の矛先を「石川県教育海」の腐敗として読者に訴えたのである。ここで生じる疑問は、そもそも皇太后の崩御が国民すべての喪中を求める事態になるであろうと、当時の人々はどの程度明確に認識していたのか、ということである。

小園・中島(2005)の研究によれば、英照皇太后の死去によって初めて、天皇、皇族の葬儀規定が制定され、国中喪の様式も定められるようになっていくという。国民の喪(国中喪)は、1月12日より30日間とし、その間歌舞音曲を停止すること、文武官は喪章を付し、哀意を表すために、掲揚する国旗は旗竿に黒色の布片を付するものとするなどが発表された。この発表が新聞報道で伝えられたのは、1月13日の新聞であった^{注13}。1月13日に文部省は「大喪仰出されたる為、全国各学校孰れも五日間休校して哀悼の意を表し奉るべき旨訓令」を出し、14日付『東京朝日新聞』に掲載された。銀行や会社、市場などは訃報に接し、ただちに休業し、新年の諸宴会の予定などもすべて見合わせたという。東京では芸妓屋、待合、料理屋などに鳴物停止の主意を伝えさせ、速やかに営業を中止することが告げられたという。

以上が首都圏での報道であったわけだが、金沢市民たちはどのような情報をどの時点で受け取っていたのだろうか。身の回りの社会活動やイベントに対する自粛ムードはどの程度共通認識されていたのか、あるいは国中喪の様式が初めて定められたという事情もあり、かなり曖昧な雰囲気蔓延していたのだろうか。もし、後者ならば料理屋は他にも多く営業していたのになぜ工業学校職員だけが「不心得」のレッテルを貼られなければならなかったのか、あるいは、巡査が懇々と諭すほど「喧嘩を極め」てしまったという程度の問題であったのか、この事件には「不敬」をめぐる評価の判断の難しさが付き纏う。

そこで、事件前後の『北國新聞』の紙面を細かく追ってみよう。

12日の紙面には「皇太后陛下の御病態」として報じられ、同日に出されたという崩御を伝える「号外」は管見では確認できなかった。13日の紙面には「皇太后陛下崩御」と題して大きく報じられた。問題は、12日の金沢市内の様子であるが、13日の紙面に前日の関係機関の動向が報じられているので把握することが可能である。それによると、真っ先に崩御の知らせを受けたのは四高で、12日午後2時に文部大臣からの公電を受けている。大島校長は直ちに「生徒一同へは校の内外を問はず謹慎静粛にすべきを命じて即日より休校」とした。だが、石川県庁では12日夕刻の退庁時になっても(内務省から)崩御の正式な連絡を受けずにいた。そのため、県立諸学校では各校長が「心得方」を県庁に伺い出たが対応できずに平常通りに授業が行われていたのである。県庁では担当課長が四高に対し「何れより崩御の報ありしやと第四高等学校へ聞き合したり」という状況だった。この日、市内各遊郭等へは東西警察署より「御大切」(危篤)との公電の段階で「鳴物を弄せざる様との訓令」が発せられた段階に留まっていたのである。

翌13日はどうだったのか。(14日の紙面から窺えるところでは)崩御の情報が周知されたこともあり、尋常中学校では午前9時に生徒一同を招集して哀悼式と休業中の心得が伝えられた。工業学

校でも梅田校長より崩御の次第が告げられ13日から5日間の休校となった。市内の遊郭や待合茶屋は、「静粛に為すは勿論、各藝妓に紋付を着し俳諧せざる様との注意」が与えられたが、営業はなされていたようである^{注14}。同じ14日の紙面に問題の「學校職員の不心得」の記事があるわけだが、これはわざわざ2日前の12日の出来事に言及している点が異例である。

以上から次の点が了解できるだろう。まず、「崩御」の情報がどの時点で把握されたのかについては関係機関ごとにバラバラで随分と差があったことである。内務省、文部省、新聞、それぞれのネットワークが分節しており、四高は対応が早かったが、工業学校は所轄の石川県庁が公電を12日中に受け取れなかった為に対応できずにいた。金沢市内で諸学校がもれなく喪中に入ったのは13日からとみてよいだろう。料理屋や遊郭、待合茶屋なども多少制限があったとしても通常通り営業していた。とすれば、12日夕刻から工業学校教職員が新年会を催したことについて、やや適切さを欠いた面がないとはいえないが、「不敬」という厳しい非難を受け、校長の進退問題へ発展していくのは行き過ぎという感を否めない。

学校や教育の問題を教員の態度や行状の問題として焦点化される手法は現代のメディアにおいても常套手段であるが、なぜ工業学校が選ばれかくも厳しい批判に晒されたのだろうか。1月の記事には学校名も「某縣立学校」と名指しを避け「不心得」として抑制をきかせたものであったのに、それから1か月も経って学校名が記される形で蒸し返され、「不敬事件」として糾弾される理由は何だったのか。

そこで少し視点を変えてみよう。当時の石川県立学校の校長が、梅田五月（第8代：明治29年3月～30年1月）であったことも、批判から校長排斥へとバイアスを強めさせた要因ではないのか、と。すなわち、梅田は政治家であって「教育者」ではなかったからである。『県工百年史』から、彼は九谷陶器株式会社の社長、「教育者としての手腕よりは、その政治的経歴によって同校の充実を推進させようと考えたのであろう。旧校舎に陶画教室、陶器窯場・絵画教室、染色機械場が増築されたのはこの時であった」（『県工百年史』、65頁）と、短い期間に政治的な業績をあげたことがわかる。そのとおり、梅田は自由党の「重鎮」（『石川百年史』、383頁）で、知事・古沢滋（明治30年1月赴任）の反自由党的な政策路線と相容れず、また、当時『北國新聞』が改進黨系であったことを加味すれば、彼はいわば政局の「犠牲の山羊」となった面もないとはいえないだろう^{注15}。

あるいは、石川県教育界は「教育者」を待ち望んでいたのかもしれない。工業学校長は、梅田のあと、第9代校長として安原時太郎（明治30年2月～30年8月在職）が短く継ぎ、1897（明治30）年9月、第10代校長として久田督（1897（明治30）年9月～1899（同32）年7月在職）が就任する。久田は1858（安政5）年、加賀藩士久田守之の子として生まれ、明倫堂、壮猶館に学び七尾語学所で英学を修めた秀才であった。その後、開成学校予科を経て、1881（明治14）年、帝国大学を首席で卒業した学歴エリートであった。就任前には、福井と三重で中学校長を務め、自他共に認める「教育者」としての経歴を積んでいた。就任後、「政治には一切かかわらず、学校整備一本に打ち込」（『石川百年史』、165頁）んだ。久田はその後、石川県尋常中学校（金沢一中）の第3代校長として功績を残すことになる。

そのように考えると、新聞メディアが学校を越えて「教育」を語り、「倫理」を誘おうしていたのは、世論の学校や教育の現状への漠然とした異議申し立てを反映しているように思われるのである。例えば、1月18日付紙面は、「國中喪期に於ける倫理教育」と題して、喪中期間にこそ学校教師の倫理教育が最も光彩を発する機会ではないのか、との論説を長々と語っているように。この不敬事件の後でも『北國新聞』は、3月1日付で「石川県尋常学校生徒が國中喪期に於ける犯罪の宣告」、

「書生黒焼事件」、3月4日付で「教育海腐敗の罪亦前知事に在り」、3月5日付で「石川縣農學校長不品行校紀紊亂事件」、「書生黒焼事件 檢視手續の當否」などショッキングなタイトルを掲げ地元「教育海」の腐敗の糾弾に余念がない。「教育者」を待ち望む声は悲痛な叫びを響かせていたかのようである。

1-2 赴任直後 ～「第四高等学校内部の暗潮」～

北條の四高校長就任はこのような時代であった。上記のような新聞メディアの教育界への介入をみると、北條が四高で断行する有名な「禁酒令」や“人格による教育”が教員や学生に支持され校風刷新が軌道に乗るには、皮肉や批判の混じった報道に臆することなく、堂々と教育理念を語り実行し、新聞メディア＝世論からの支持を取り付けなければならなかった。予想通り、北條は自身に対する四高内部からの疑心暗鬼と批判を“通過儀礼”として受けるという試練に遭遇するのである。

果たして、工業学校教職員の不敬事件から約一年、北條の四高着任から一か月後、早くも新聞メディアは、「第四高等学校内部の暗潮」と題した次のような記事を掲載した。

第四高等学校にては新校長北條時敬氏来任以来自然相反発する二派を生ぜんとするの傾向あり、即ち校長派、非校長派—金沢派、非金沢派にして校長派は金沢派と見るべく非校長派は非金沢派と認むべきに似たり。蓋し職員中新校長に快からざるもの自ら相投合して非校長の無形的団体を結びたるものと知られたり、但し右は秘密の間にありて未だ其現象を外部に示さざるを以て何人が果して校長派にして何人が果して非校長派なるかは一々名言すべからずと雖も、兎に角校内の潮勢を察するに二派の暗流相迫りつゝあるは疑ふべからずと云ふ。(『北國新聞』1898 (明治31)年4月11日記事)

赴任早々、校内の派閥争いに巻き込まれたことが新聞メディアにリークされたわけである。このような「暗潮」を詳らかに記者に語り、また「擔板漢」（一面だけを見て大局を見得ぬ人）という陰口を囁いたのは、四高関係者かもしれない。こうした守旧な考えとの葛藤に、北條はどのように対応したのだろうか。このあとの紙面は、授業時間を尊重すべきと考える北條が端艇会の準備のための休講措置に反対したことに対する教員・生徒を巻き込んだ紛争を伝えるなど、北條の教育理念と判断をめぐる四高内部の混乱は、マスコミが介在した社会問題として世間の注視するところとなっていく。

1-3 赴任直後 ～「書生登楼事件」～

「書生登楼事件」は、1898 (明治31)年5月に起こったもので、四高医学部学生2名と農学校生徒2名が西廊に登楼したことが発覚、店は条例違反で3か月の営業停止、学生らは放校処分となった。

事件は、四高の登楼学生1名が「勘定に差し詰り行燈部屋に封鎖せられ居ること」を知った仲間の四高生が「之を救ひ出さんものと該楼へ赴きたる處を警官に尾行せられ其取調べを受け」て発覚した。ところが、この事件は条例違反を意識しすぎた警官の“勇み足”があり、農学校側の調査によって、「農学校生徒」というのは誤りで1名は同校の卒業生、もう1名は退学者であったことが判明した。また、四高の2名の学生中、警官に尾行されて尋問された学生のほうは嚴重注意の処分済み、四高側の調査で「他に放蕩無頼なる学生を査出して放校の嚴罰を科し」たという。5月19日付『北國新聞』は「貸座敷営業停止と県知事の職責」と題して、学校側の詳しい調査の前に「石

川縣知事は大早計にも疎漏なる警官の申し出を暴信し取敢へず営業停止を命じて」しまったことを批判した。

学生の実名の報道、続報、続々報で刻々と訂正される事実関係、果たして事件の真相は何だったのか。記事は、警官に尾行され尋問を受けた四高生が、友人を救い出そうと遊郭に赴いた学生であったことが判明するオチがついて、読者を飽きさせない推理物に仕立て上げられている。

こうした事件の一連の報道からみえてくるのは、学生の日常の行状や逸脱行為が官憲側はもとより新聞メディアの敏感なアンテナで日々把握されていたことである。記者の側からすれば「学生」という地位の“あいまいさ”がスキャンダルで歪められ、増幅すればするほど記事は娯楽的色彩を帯び、読者の興味を惹きつける魅力をもつと認識していたはずである。と同時に、記事には、大人でもなく子供でもないこの“あいまいな”カテゴリーを不問にせず、世論の監視のまなごし下に置くことで理解可能なものにしていきたいとする言外の意志も透けて見える。明治三十年代に入ってから地方都市・金沢においても、メディアが道徳や倫理を内包する教育言説を語る機能をもつようになってきたことを示す例証である。学生を尾行し尋問した警官はおそらく新聞紙上の言説を意識していたはずだ。メディアが法に忠実だけでなく、官憲を超えて秩序をつくりだし、教育者を超えて倫理を語り「世論」を興そうとしていた。

しかし、ここで留意すべき点は想定される「世論」とは一体誰を対象にしているのか、その範囲である。当時の新聞読者層として、ようやく職工読者層が現れるにしても、やはりその中心はリテラシーの高い、学生、教員、官吏などの知識人層と商店経営者層であった^{注16}。とすれば、このようなスキャンダル記事を興味深く読み、逸脱行為を嘆き、また反面教師として我が身を振り返る材料として、論説方針をむしろ共感的に支持していたのは、学生や教員自身なのではなかったのか。新聞メディアの一見勇み足と思われる一連の報道は、教育社会の謂わば“ネガ”としての像を提供することで、教育者として何が不心得なのか、あるいは学生として何が守るべき矜持なのかを暗喩し、学生や教師自身が自らのアイデンティティを定めていく準拠枠としての機能を果たしていたと解釈することもできるだろう。

このような新聞メディアの状況は、たとえ北條自身が訝しがられ皮肉な記事の対象となったとしても、「教育者」北條としては、自身の教育理念を訴え実現させていくにはむしろ有利に働いたと考えられる。その事情を次節で検討してみよう。

2. 北條の企図する〈教師—生徒関係〉とは何か

前節では、学生や教員をみる世論の側、とりわけ新聞メディアが、従来までとは異なるまなごしを向け始めるようになったこと、その背景におそらく地方都市での最大の新聞読者層である官吏、教員、学生、高級軍人、自営商工業者など中等教育以上の学歴をもつ知識層の物の見方に変化が生じつつあったことが推察された。

このような社会的状況を意識しながら、北條時敬は、四高に赴任し学生の教育にどのような方針をもっていこうとしていたのだろうか。

時代は、「社会的弛緩状態」（筒井，1995）ともいうべき状況を呈していた。学生は天下国家を論じることも減り、かといって「人生とはなんぞや」などの個人的問題の思索に勤むようになるには時期尚早であった。煩悶青年の象徴となる藤村操の自殺は1903（明治36）年5月とまだ先のことである。教養主義の旗振り役として学生を鼓舞した新渡戸稲造の第一高等学校長就任は1906

(明治39)年になってのことである。学生生活の楽しみとしての校友会の束ねる課外活動も組織としてはっきり位置付けていなかった。また、校外生活を潤す大衆娯楽もまだまだ少なかった。青年を墮落させる男女交際もその対象となる女学生はこの時期以降ようやく学生街に輩出されるようになっていくのである^{注17}。

では、「教養」や「修養」という“その後に流行する”言葉を用いずに、北條はどのような新しい学生気質を育もうと考えていたのか。

まず、北條は、幕末期から維新後しばらくにかけて流行した書生の風儀、すなわち、乱雑勝手な振る舞いが磊落であって美德でもあると捉えるような考えには反対であった。山口高等学校長時代に寄宿舎の学生への演説でそう述べている（「維新前ノ乱雑勝手ヲ以テ磊落トシタル下流書生ノ風儀ハ決シテ今時ニ許ス可ラサル者ナリ」^{注18}。

彼は、四高の校風の基盤として最低限必要な学生気質として、「質朴ノ風」、「廉恥ヲ重ンズルコト」、「品行ヲ正クスベキコト」の3点を挙げている。北條の見るところ、当時の四高学生の問題点は、「品行ノ形跡存在スルコト」、「紀律ノ習慣未ダ立タズ禮儀ニ習ハザル者多キコト」、「飲酒ノ行ハルハコト」、「體面ヲ装フテ内實ヲ蔽ヒ誠實ヲ缺ク者アルコト」^{注19}であった。

このような諸課題を抱えながら、北條は赴任直後から、大きな方向性として二つの観点、〈授業時間の確保〉(2-1)と〈教師-生徒関係の見直し〉(2-2)から精力的に改革を行おうと考えていたと思われる。

2-1 授業時間の確保と学生の身体管理

まず、北條は赴任早々、授業時間を確保することから改革に手をつけた。学校が1日休業を与えればそれは学生1人に2年半の休業を与えるロスに相当する、と皮肉り、学校行事の準備に伴う休課を削減しようとしたのである。

例えば、「授業時間ヲ休ム可カラサル所以…(略)…本校一日ノ休業ハ生徒一人二年半ノ学業ヲ休マシムルニ同シ…(略)…」続けて、「授業ヲ休マザル為メ方法ヲ改ムルヲ要スル事 北辰會、十善會、運動會ノ事業休日等務メテ正課ノ無キ時ヲ選ブコト。其勞役雜務ノ幹旋ニ當ル者ハ其勞ヲ正課以外ニ取り會合ノ準備跡片付ノ為メニ業ヲ廃セサルヲ期シ止ヲ得ス其学生ノ休課シタル時ハ他生ハ其勤學ヲ補助スルコトヲ勤ムルヲ要スベシ」^{注20}との訓示から、北辰会や運動会などの行事を休日に行い、その準備後始末も正課の時間を費やすことなく正課外に執り行うことを指示したことがわかる。

この方針が、学生間のみならず教員間にも物議をかもすことになる。明治31年春季の端艇会準備を巡って「第四高等学校各級幹生の辞任」という事態を招いた事件である。『北國新聞』(明治31年4月11日)の記事からその概要をみてみよう。

四高では従来運動会や端艇競漕においては数日前から準備のために授業を休みにしていたが、「新校長は授業時間を貴重するとの故を以て」、「一日の休業をも與へざれば学生は練習若くは準備の餘暇なく、止むを得ず授業時間を欠きて練習に出掛くるの有様なるを以て職員中に於ても或は競漕當日前一二日の休暇を與へられんことを各級幹生と共に請ふ所ありしに校長は断固として容れざりし」。この措置に不満をもった幹生18名は全員辞表を校長に提出したのである。

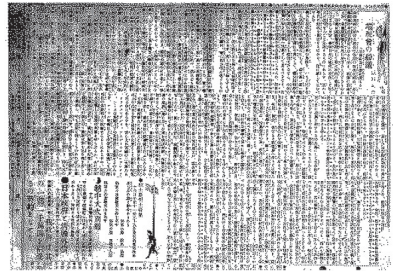


図2 「端艇會の紛議（北條校長は擔板漢なり）」を伝える『北國新聞』明治31年4月17日記事

さらに、予定されていた行軍も従来は一週間前後の期間を確保していたが、北條は授業時間確保のためにわずか一泊行軍に止めた。宿泊所においても全て禁酒にしたので「学生一般に大不平を醸し或は校長との間に衝突を見るの徴ありと云ふ」、と伝えている。この結果、行軍当日、端艇会の争議事件の影響もあり「学生一般に不平ある折柄とて、いづれも熱心に運動せんとするの色なく、随つて演習の結果は殆んど講評を償せざるまでの不成績なりき」となった。（この行軍の行程は、北軍と南軍に分かれ、北軍は金石街道へ、南軍は安原街道へ向かい、普正寺浜（現：健民海浜公園付近）にて両軍の対抗運動、その後、北軍は金石泊、南軍は松任泊をして帰校するものであった。）

この対立図式は、単に、授業時数確保を優先する知育尊重主義か勇壮剛健の気風を養成したい体育尊重主義かの対立ではなかった。では、北條の狙いは何だったのか。

それは、学生は正課／正課外の区別なく節度を保ち身体と気質を自ら適切に管理すべきだという考えからであった。北條は、四高生の身体を観察して、「快活ノ氣象ニ乏シク惰弱ノ風ニ安ンズル」傾向があることを憂い、これを「極力矯正ヲ要スル點ナリ」と考えていた。「惰弱ノ風」とは、例えば、休日を利用した「兎狩會」を医王山付近で開催したところ、有志参加者は僅かに12名にすぎなかったエピソードなどを指している。学生は、正課が休みになる引き替えでないと戸外運動や散策を敬遠する風潮があることを、彼は嘆いたのである。（「生徒ハ正課ヲ休ムニ非レバ此ノ如キ外遊ヲ喜バズ生徒一般日曜日ニハ宿處ニ蟄在スルニ非レバ金澤市中ヲ往來スルモノ、如シ快活ノ氣象ニ乏シク惰弱ノ風ニ安ンズルハ慨歎ノ至リナリ之風極力矯正ヲ要スル點ナリ」^{注21}）

端艇競漕や行軍で日程の縮小案を彼が頑に主張して譲らなかつたのも、これら行事の前後の弛緩部分に「惰弱の風」の入ることを危惧していたらしい。この点は、『北國新聞』明治31年4月24日記事に「第四高校端艇會の紛議に對する校長派の陳辯」と題して次のような経緯が指摘されていることから窺える。すなわち、端艇會については「従来第四高校にて競漕會ありシタには必ず遊郭の繁盛する實例あることを」と、行軍については「昨年行軍の際には辰の口温泉場にて全隊悉く青楼に宿した」ことを読者は知っているのか、と。つまり、北條の狙いは、授業重視を標榜することで正課外の私生活に生ずる風紀の弛緩の付け入る隙を無くそうとしたものだったのである。

5月に起こった「同盟休校」事件にも北條は厳しい態度で臨む。1898（明治31）年5月26日のこと、法科文科2年の多数の生徒が威海衛より帰營する軍隊^{注22}の出迎えと称して授業を欠席した為に、授業が成立しなかつた。これは「同盟休校」にあたる、と北條は判断した。また、法科2年の生徒がその前の週に同級生の死にかこつけて授業を欠席したが、これも「同盟休校」であるとみなした。

学生や教師の中にはこういう北條の厳しい方針のうちに真の意図を汲み取って校風の刷新を期待し「校長派」に組するものも少なからずいた、という。新聞メディアの論調もこれ以降急速に“親北條”に傾いていく。学生や教員もこれら諸事件を通して北條の人間性に間近に触れる機会があり、彼の教育理念の支持者が次第に（しかも意外に早く）現れるようになるのである。

2-2 学校＝家庭、教師＝父のアナロジー・モデルの提出

それでは、教師に対して北條はどのような方針で臨んだのだろうか。

「教官ハ生徒ノ模範タルヲ以テ自ラ任ズベキ」と考える北條は、始業式等の訓話で生徒に対しては「品行修マラザルハ本校生徒タルノ資格ヲ欠乏スル」と語る一方で、教師に対しても「自ラ師表ヲ以テ期スベキ」と内訓していた。彼の校風刷新にかける真剣さは、1899（明治32）年、「教授懲戒ノ件」として某教授を懲戒処分にした件からも読みとれる。某教授はすでに外務省翻訳官として

転任することが内定した時期に、法科3年生の送別会を料理屋鏝屋で催した際に「芸妓ヲ招キ席ニ侍ラシメ其遊興ニ供シタル」（「教授懲戒ノ件」明治32年1月20日）ことを北條はあえて問題視したのである。

かねてから四高では宴会に芸妓は招かない規定になっていたが、宴酣になった頃、幹事の学生2人が某教授の指示で芸妓3名を呼び寄せるよう楼主に命じたという。「柏田文部次官へ教授懲戒処分稟議書」（明治32年1月27日）によれば、学生は教師の熱心な学問への態度に帰服して良き習慣が身につくものである（「爾来生徒ハ教官一般ノ熱心勩励ナルニ帰服シ日ヲ逐フテ良風ニ赴キ来リ」）、教師と学生の関係は非常に重要である、懲戒処分として公に示した理由は単に四高の校風刷新に止まらない教育社会全体への影響の大きさを勘案してのことである（「我校風ヲ振起スルニ止マラズシテ教育社会一般ニ影響スル所少カラザルヲ信ス」）という信念があったからである。

彼には、教師たるものは生徒に親切に「教養ノ意」、すなわち「教え育てる」意図をもって接する態度が必要だ、という思いがあった。彼が山口高等学校長時代の言をみてみよう。「保証人トナリ級長トナリ或ハ生徒ヨリ學問上ノ質問他ノ事故ニ付キ相談ニ来ルトキハ教官ハ其機ニ於テモ 教養ノ意ヲ持シテ之ニ接スルコト」^{注23}、「生徒ハ教官ノ宅ニ出入スル等可成親炙シテ教ヲ乞フ可シ」^{注24}、という言明がある。

このような北條の信念は、四高赴任に際してもさらに精力的に＜教師－生徒関係＞の構築に踏み込んでいったように思われる。1898（明治31）年1月14日の「生徒一般ニ訓示ノ演説條目」中に「一本校師弟間ノ面目」として「一 師弟分限ヲ守リ禮ヲ正シクシテ相見ユルコト」、「一 師弟和楽ノ道」、「一 家庭的團體」の3点が挙げられている。ここにみられる教師像は、学校＝家庭、教師＝父、のアナロジーであり、学校は家庭的雰囲気の中で教師の人格による陶冶がなされる場であるべきことが示されている。実際に、北條は1899（明治32）年2月23日の「級長會ノ節談話事項」の中に「副保証人ヲ廢シ教官監督ノ制ヲ設クルコトノ可否」を問うているように副保証人制度に代わる教員の個々の学生に対する保護者的な職責、という立場を具現化させようとしていた。

このほか、学級担任として受持生徒との関係をもっと親密にすること、校友会や寄宿舎の会合になるべく教員も顔を出すこと（「級長及受持生徒ノ関係ヲ近クスルコト」、「校友会寄宿舎ノ會合ニ成ルベク教官ノ出席ヲ希望スル事」）も要求している。要するに彼は、＜教師－生徒＞の基本的な信頼関係の構築の上ではじめて「教養」（教え育てる）が成り立つ、という現在の生徒指導でも用いられる金言を提唱しているのである。

時習寮の管理にしても、従来まで体操教師が舎監として務めていた慣例を改めた。北條の盟友・三竹欣五郎教授（ドイツ語）のエピソードを紹介しよう。明治31年、自ら時習寮の舎監として入舎志願をした三竹を揶揄した某教員の言に対して、北條は次のように諫めた、「三竹教授將ニ時習寮ニ入舎セントスルニツキ今井舎監ノ『三竹先生ハ身ヲ以テ諸君ヲ□キント』ノ一言公表ニ関シ注意ヲ述ブ」と。そして、三竹が入寮生から批判のあったときには、これを意に介さず支持し続けた（「寄宿生ノ一人ヨリ匿名書ヲ以テ三竹教授佐野助教授ニ関シ好悪ノ意ヲ陳シ来リ不穩ノ文字アリ主意取ルニ足ラス」^{注25}）。この三竹が西田幾多郎と共に北條のよき理解者としてこの時期の校風刷新をリードしていくのである。

さらに1899（明治32）年になって、北條は教員と学生の親睦組織として成立する「會」——欧米風の「club」——、要するに「校友会」の東ねるサークル活動の活性化について検討すべく組織を立ち上げている。

そもそも、高等教育機関に在籍する学生が、スポーツや文芸、音楽など多様な趣味に関心を寄せ、

「校友会」のサークルとして活動を行うようになるのは明治後期になってからのことである。その嚆矢は、1886（明治19）年に東京大学で「身心を鍛錬し、又相互の親睦を謀る」ため「運動会」と称する校友会が設立されたことに始まる。その後、明治二十年代のスポーツ・弁論・雑誌ブームがあり、明治三十年代後半以降、スポーツの対抗戦を花形に、哲学や人生問題を語り合うキャンパスライフの中心として育っていくのである。

こういった「校友会」は教師と学生の親睦団体であることが基本にあり、各サークルの長も教員が務め、それらを束ねる組織も教師のリーダーシップが相当程度あった。例えば、1892（明治25）年に設立された第一高等学校音楽部の場合、すでに唱歌授業が所縁で設立されていた「唱歌會」が「音楽部」となったものであるが、その昇格には「校友会委員会」で学生代表の提出した嘆願書を教員である委員長中心に決議することによって認められていた。四高の場合、校友会は、1893（同26）年の「第四高等中学校校友会」が嚆矢で、これの解散後、1895（同28）年2月に「北辰會」が結成されている。「北辰會」は「学業を講究し、体育を錬磨し、会員の徳性を涵養し、もって純良なる美風を発揚する」ことをうたい、通常会員として四高生徒、特別会員として教職員、客員として旧教職員から構成されていた^{注26}。北辰會の当初、学芸部としては講談会、演説討論会が、運動部としてはベースボール会、ロンテニス会、フートボール会がそれぞれ設けられていた。機関誌『北辰会雑誌』がその後の四高文化に彩りを添えたのは周知の通りである。

さて、北條の認識によれば当時の四高は、「運動ガ振ハヌ」、「大ニ運動ヲ盛ンニセネバナラス」という現状であった。この点は教員、学生ともに思いを同じくするところがあったわけだが、なかなか盛んにならないのを、業を煮やした北條が調査委員会を立ち上げて振興策を練らせようとしたのであった。

校友会の方向性を示すキーワードは「家庭的團體」であった。「師弟ハ温暖ナル情味ノ存在アラザル可カラズ。諸會ヲ統一シテ之ヲ家庭的團體ト為シ仕事ヲ共ニシ談話ヲ共ニシ運動ヲ共ニシ雍々和楽スルノ實ニシテ行ハレ一面ニハ學校ノ教官デアリ生徒デアリ又一面デハ父子ノ如ク亦互ニ眞實ナル學友デアラバ本校教育上ノ面目何者カ之ニ加フルヲ得ン何ノ氣風カ發揚セザルヲ憂ヘンヤ」^{注27}、と述べられているように、ばらばらに組織される「会」を統一して教師と学生が共に仕事をし、談話をし、運動を行う、しかも教師と学生の関係は父子のようであり、学生相互が真の「学友」になるようにしなければ、どうして校風の発揚などできるのか、という問題提起を行ったのである。

2-3 北條の去った後～オルタナティブ（alternative）な教師像の模索へ～

以上のように、北條の理想とする〈教師—生徒関係〉とは、学校＝家庭、教師＝父のアナロジーをもとに結ばれるものであり、教師の人格による陶冶という基本ラインを踏まえつつ、教師が「教養ノ意」すなわち「教養育てる」意図をもって学生個々への保護的な職責を果たすことが求められた。そして寄宿舎から校友会に至る学校生活全般において「家庭的團體」として組織化されるような大きな構想を含んでいた。記念すべき1900（明治33）年の「三々塾」の創設はその理念を具現化したひとつの象徴であった。

しかしながらこの構想は道半ばにしてペンディング（pending）となる。北條は、1902（明治35）年、広島高等師範学校初代校長として転任、四高を去ったからである。

ちょうど中央の第一高等学校では、先行する校風論や寄宿舎改革の成果として、高等学校は学生の自治・自律による自己研鑽を行う場であることを標榜し始める。四高においては、一高の影響を受けるにはタイムラグがあり、北條の後を継いだ吉村寅太郎校長（在任期間：1902（明治35）年

5月－1911（明治44）年8月）は、北條の目指した“親密な”＜教師－生徒関係＞を見直し、これを断ち切ろうとしていた。吉村校長は、「三々塾」についてもそのメリットよりも弊害を懸念し、教師が自宅に生徒を下宿させることも厳に慎むべきこととし、一年生全員の寄宿舎入寮の方針を検討させていた。西田の日記を引用しよう。

生徒と教師との間に私塾の如き者があまり多く出来之が為に弊害を生ずるが如き事ありては困るとは（吉村）校長が數々云はるゝ言に御座候 北條先生の時代には公認下宿の如き者を作られ切りに奨励せられしことが今は反て心配の種となるとは人の心は色々様々と存じ候（1905（明治38）年5月18日、堀維孝宛書簡、西田（1966）、68頁）

では、北條の薫陶を受けた西田幾多郎や三竹欣五郎は何を考え、どう対応策を練ったのだろうか。結果として四高も、北條の薫陶を受けた西田幾多郎や三竹欣五郎の努力によって、学生の自治・自律と自己研鑽を支援する教師像として、「黒子」としての教師像が模索され創られようとするに至る。しかし、これへの推移は容易ではなかった。

この点についてようやくわれわれは、井上（2012）の論点に到達したわけである。以下、同論文を援用する形で西田と三竹の苦悩の有り様をみていこう。

吉村校長の方針について、西田や三竹はこの動きを訝しく感じて批判していた。それが確執を生む原因で、彼らは他の教員たちからも距離を置かれ四高内部で微妙な立場に立たされることになった。当局の方針の変化について、西田は「学校に於ては妙なる處に考えを置き徒らに教師なる者の心事を疑ひ教師と生徒との間に親密なる関係の生ずるを喜ばざるの風あり」と当惑していた。西田たちにとって、「寄宿舎といふ如き者は必しも完全なる教育場にあらず、三々塾の如きは遙に之に勝る」場であったからである。そのため、彼は「小生などは学校の方にては眼の上の瘤の如くに思はれ」^{注28} していると自嘲する日々を悶々と過ごしていたのである。

西田や三竹のような北條流の師弟関係に理念を置く教師にとって、北條の去ったあとの四高の方針変化には忸怩たる思いがあったろう。しかし、三竹らは、彼＝教師が、学生指導の前面から退く代わりに、学生の自治・自律と自己研鑽をいわば“黒子”として背面から助言し支援する教師を演じるようになる。これは、北條流の＜教師－生徒関係＞を踏まえながらも、吉村校長の方針とも葛藤の少ない現実的な解決策としてオルタナティブ（alternative）な教師像を模索であった。この努力が三々塾のリーダーも務めた河合良成の校風改革運動の成果となって現れ、さらに「超然主義」の神話誕生に繋がっていくのである。

おわりに

小論は、北條時敬の教育者としてのポリシーを、＜教師－生徒関係＞の構築という観点から検討してきた。明治という新しい時代の骨格が定まっていく過程において、そこに生きる青年たちのエリートとしての矜持をいかに育んでいくのか、そのために＜教師－生徒関係＞はいかに結ばれるべきか、その理想像を求めて苦闘する北條の教育者としての答を析出する試みを行った。彼の出した答はどのような人生行路から発露されたものなのだろうか、その原点は彼自身の若かりし頃の自己研鑽への態度に由来しているのではないだろうか。最後に、若干の考察をおこなって小論のまとめとしたい。

北條は、自身が学生時代の1882（明治15）年、土岐嶺ら8名の旧加賀藩出身学生が集い、「人材

養成ノ目的ヲ以テ一社ヲ起サンコトヲ議シ」て結社を興している。全国に先駆けての同郷会型の寄宿舎・久徴館の設立である^{注29}。この寄宿舎は、学生が軽操浮薄の風に染まり放蕩遊逸する習慣から脱し志を貫く、というねらいをもって彼ら自身により設立されたのである。このように、彼は「学生」としての自身の在り方に早くから深い関心があった。

青年期の北條の姿勢は、大学院時代に引き継がれる。『久徴館同窓会雑誌』第7号(明治22年1月)に、帝国大学理科大学大学院時代の彼(当時31歳)の久徴館で行った演説が掲載されている。ここには北條の当時の書生たちを取り巻く文明社会の負の側面を見据えつつ、青年の生き方や彼らの学問への態度の在り方についてその基本的な考え方が示されているのである。少し概観してみよう。

まず文明化の進展の中で、社会風俗の変化を、都会の利便性のなかでの心身への弊害といった側面から説かれている。鉄道や汽船で利便性の向上、「電気燈」や「蒸気暖室法」の普及で、都会がより華やかになる一方で、青年の「耳目高尚ニ過キテ實力従ハス」、「便利ヲ知ルニ従フテ氣象乏ク奮慨セス貴フヲナク重ンスルヲナク信スルヲナク強ムルヲナク行為修飾ヲ専ニシ思想皮相ニ留マル」と述べるように、彼らのいわば“人間力”ともいうべき能力が衰退してしまわないか、と嘆いている。もちろん、これはいささか極論であるとは自覚しつつ、北條は、昨今の「気風ハ放逸軽浮ナリト思ハレマス」と断言する。学生風俗についても、「書生一体ノ風儀ヲ視ルニ歎息ニ堪ヘス」と述べ、具体的には、暴酒乱淫して野卑な雰囲気を楽しむ柔弱な者——もっともこれは放逸の甚だしい場合であろうが——また、囲碁や花合わせに時を忘れ、談話を貪ってしまい適度に切り上げのできない者、学問に熱心なあまり運動を怠る者、等の例を取り上げ、自戒を勧めているのである。

われわれは、北條時敬校長が在職期間中にその薫陶の対象とした四高生の風俗や態度が当時のどのような教育社会の状況を反映して問題化されたのかを分析しながら、北條の提示した〈教師〉の在り方を四高史に位置づける試みを行ってきた。彼は、まさに旧制高校の草創期のアノミックな状況にあって、四高生をわれわれの馴染み深い旧制高校らしい文化の担い手へと高めていこうと努力し、また自ら教育者として理想の「教師」の在り方を内外に示したパイオニアであった。その精神は今も私たち一人一人の「教師」の中に引き継がれているといっても過言ではないだろう。

参考文献

1. 第一高等学校寄宿寮編, 1930, 『向陵誌』第一高等学校寄宿寮。
2. 筧田知義, 1968, 「高等学校(旧制)の教育と寄宿寮について—校風論の発生—」『人文』第14集, 京都大学教養部。
3. 金沢大学資料館, 2012, 『人物で見る金沢大学の150年—その伝統と創造—』金沢大学創基150年記念事業関連企画, 金沢大学資料館。
4. 唐澤富太郎, 1955, 『教師の歴史』創文社。
5. 『県工百年史』編集委員会編, 1987, 『県工百年史』石川県立工業高等学校創立百周年記念実行委員会。
6. 木下秀明, 1971, 「わが国における運動部の成立と変遷」『体育の科学』第21巻第11号, 684-687頁。
7. 小園優子・中島三千男, 2005, 「近代の皇室儀式における英照皇太后大喪の位置と国民統合」『人文研究』157, 神奈川大学人文学会誌, 65-99頁。
8. 旧制高等学校資料保存会編著, 1980~1985, 『旧制高等学校全書: 資料集成』第1巻~第8巻, 別巻, 昭和出版。

9. 井上好人, 2009, 「菊池幽芳・新聞連載小説「寒潮」に表象された四高生と女学生の恋愛」『金沢星稜大学人間科学研究』3(1), 7-13頁, 金沢星稜大学人間科学会。
10. 井上好人, 2011, 「四高における音楽部の創設--石倉小三郎に集う洋楽愛好者たち」『金沢星稜大学人間科学研究』4(2), 7-12頁, 金沢星稜大学人間科学会。
11. 井上好人, 2012, 「四高・「超然主義」の神話誕生: 河合良成の校風改革運動と時習寮の「38名」」『金沢大学資料館紀要』第7号, 1-15頁。
12. 井上好人, 2013, 「四高「寒潮事件」に秘められた四高生と女学生との純愛 ―なぜ"墮落学生"のレットルが貼られたのか―」『金沢大学資料館紀要』第8号, 35-47頁。
13. 井上好人, 2014, 「『当世書生気質』にみる明治十年代の学生の“憧れ”と“不安”―「江戸」の空間を彷徨する上京インテリ学生たち―」『金沢星稜大学人間科学研究』7(2), 5-12頁, 金沢星稜大学人間科学会。
14. 「一泉」六号, 石川県立泉丘高等学校内一泉同窓会, 1982年10月1日発行。
15. 西田幾多郎編, 1931, 『廊堂片影』教育研究會。
16. 西田幾多郎, 1966, 『西田幾多郎全集』第18巻, 岩波書店。
17. 作道好男・江藤武人編, 1972, 『北の都に秋たけて―第四高等学校史―』財界評論新社。
18. 四高同窓会, 2001, 『第四高等学校時習寮史』(複製版)。
19. 高橋佐門, 1978, 「旧制高等学校における校風」『国立教育研究所紀要』95, 147-160頁。
20. 竹内洋, 1999, 『学歴貴族の栄光と挫折 (日本の近代12)』中央公論新社。
21. 「時の曠野―第四高等学校時習寮」編纂委員会, 2004, 『時の曠野―第四高等学校時習寮 1893-1950』。
22. 筒井清忠, 1995, 『日本型「教養」の運命』岩波書店。
23. 上田久, 1978, 『祖父 西田幾多郎』南窓社。
24. 山本武利, 1981, 『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局。

注

- 1 出典は、「東北帝国大学事務局提供総長写真」
URL : <http://webdb3.museum.tohoku.ac.jp/tua-photo/photo-disp-b.php?inst=&area=&sbj=&yrs=&p=55>
(2015年12月25日)。
- 2 西田幾多郎編 (1931), 884-885頁。
- 3 四高同窓会 (2001), 14頁。
- 4 笈田 (1968)。
- 5 高等中学校は、1886 (明治19) 年の中学校令から1894 (明治27) 年の高等学校令までの制度である。第四高等中学校は、1887 (明治20) 年、石川県専門学校を前身として設立された。
- 6 笈田、前掲論文。
- 7 一高校長を務めた狩野亨吉は、1898 (明治31) 年に33歳という若さでの第一高等学校校長となった人物であるが、1892 (明治25) 年から1894 (明治27) 年まで第四高等中学校教授を務めている。帝国大学文科大学哲学科の大学院を修了しての四高赴任であった。
- 8 西田幾多郎編 (1931), 361頁。
- 9 唐澤 (1955), 84-85頁。
- 10 「第一学期修業ニ際シテ演説案 明治廿九年十二月廿一日」, 西田幾多郎編 (1931), 3頁。

- 11 上田久, 1978, 『祖父 西田幾多郎』, 128頁。
- 12 「孝明天皇の皇后。九条尚忠（ひさただ）の6女。弘化2年統仁親王（孝明天皇）の妃、3年天皇即位後女御となる。万延元年祐宮（明治天皇）の立太子のとき、実母と公称され（生母は中山慶子）、慶応4年皇太后となった。明治30年1月11日死去。64歳。名は夙子」（『デジタル版日本人名大辞典+Plus』）。
- 13 小園・中島（2005）で用いられた史料は『東京朝日新聞』である。
- 14 ただ、紙面は「當夜某々遊郭の如きは間々鄭聲卑歌を弄するものありしと云う何等の不敬ぞ」と心得を守らずに「鄭聲卑歌を弄」していた店に対して「不敬といふべし」の小見出しを付けて手厳しく批判している。
- 15 梅田校長の罷免については県会で取り上げられ、今度は知事不信任案の可決という事態を招いてしまう（『北國新聞』1898（明治31）年5月7日、13日、19日の記事）。教育の側の問題はそれ自体の問題というよりも、市民・県民の注目を惹く格好の論点として、新聞メディアと政治を交えた複雑なパワーゲームの一角を占めるようになっていった。
- 16 山本武利（1981）、191頁。
- 17 石川県の場合、ミッション系私学の金沢女学校（現：北陸学院）は1885（明治18）年に設立されているが、公立女学校は、明治31年に設立された金沢市高等女学校（後の石川県立第一高等女学校）が最初である。
- 18 「寄宿學生ニ對スル演説草案 明治廿九年五月七日」、西田幾多郎編（1931）、2頁。
- 19 前書、1899（明治32）年2月23日の「級長會ノ節談話事項」
- 20 「訓示演述案 明治三十一年三月十四日」西田幾多郎編（1931）。
- 21 「無題」、西田幾多郎編（1931）、2-3頁。
- 22 日清戦争後の下関条約により威海衛の保障占領を行っていた軍が、1898（明治31）年5月に復員したことを指す。
- 23 「第一学期修業ニ際シテ演説案 明治廿九年十二月廿一日」、西田幾多郎編（1931）、3頁。
- 24 明治33年2月15日「級長會議事項」、前書、31頁。
- 25 前書、31頁。
- 26 「時の曠野—第四高等学校時習寮」編纂委員会（2004）、34頁。
- 27 「諸會構造調査ニ関スル希望」、西田幾多郎編（1931）、21-22頁。書かれた時期は、おそらく明治32年1月。1月14日に調査委員会を設けることを幹部学生に伝えたという記事がある。
- 28 西田幾多郎（1966）、66-69頁。
- 29 この時興された久徴館は、1885（明治18）年、加越能育英社（明治12年に創設された日本で最古の育英事業団体）に吸収され入館者を増やしながら加越能郷友会として発展していく。